〈共同研究報告〉

日清戦争直後における対中国観及び日本人のセルフイメージ

――『太陽』第一巻を通して

錢　鷗

明治二十七年末、博文館の総合雑誌『太陽』は日清戦争の機運に応じるかのように誕生した。創刊後の第一巻（明治二十八年、全十二号）において、『太陽』に顕著な性格の一つは、自国の問題を遥かに越えた対外的関心の強さである。そして明治二十八年の対外的関心は、言うまでもなく日清戦争をめぐる「対清関心」にほかならなかった。では、当時の「対清関心」の実態はどのようなものであったのか、それと関わる当時の中国観、またそこに日本の自己意識はどのように反映されていたのか、そうした問題を『太陽』の言論展開をたどりながら考察してみたい。

一、日清戦争に対する一般的な社会反応

1、国民の祝捷

日清戦争に対する当時の日本国民の基本的な態度、戦勝が社会にもたらした一般的な反応については、国民の祝捷大会から端的に窺うことができる。まず明治二十七年十二月九日東京日比谷で行われていた「往来の群聚は、山の崩るる如く潮の湧く如く」であった祝捷大会は、次のような盛況であった。

> 祭に似て祭に非ず、開帳に似て開帳に非ず、憲法發布式以来の壮觀、……嚴肅なる『君が代』の曲は樂隊より出でゝ皇城松深き處に反響せり、會員和し、萬民和し、天地ために之を傳へて四海に及ぼさんとす、萬歳三呼の聲いまだ終へざるに、（「第一祝捷大会を観る」、第一巻第一号「社会」欄）

そしてそこに現れていた敵国または敗国としての中国の姿は次のようである。

> 提灯に東西二洋を畫がきて地球儀に擬し、その頂上に武器製の蜻蛉をとまらせ国旗をひるがへして、筆形の大提灯

之をいたゞき、其下に同じく提灯製の豚尾奴の生首を六つ七つつるしたるは自由新聞社なり……

折と罎とを前にして且つ食ひ且つ飲む紳士野営の一幕を演じ出だせるを、壮士興にのりては蒲鉾を箸に貫ぬきてチャンチャンの首なりと呼び、折を砕きては天津北京亦かくの如しと吟ず、此歓呼聲中に在りて泣くが如く恨むが如くは池に浮べし定遠致遠の両艦のみ……

見よ風に飜へるの紙風船は悉く鮮血淋漓たる支那人の首なるを……嗚呼第二祝捷大会に於て北京を陥るゝの快劇を見ん事、余輩の指を屈して待つのみならんや（同右）

以上の大会の記述から読みとれるのは、何よりもまずこの戦争に対する国民の普遍的な支持と奮う士気である。その高揚は日本への自信を深めると同時に中国を軽んじる方向へ向かう。それは日本の中国観の大きな転換であった。文明開化以来、日清戦争までの日本にとって、時代遅れの中国は己れの理想とまるで正反対的な存在である一方、強い経済力と軍事力をもつ「中華帝国」の延長線に立つ強大な国家としてのイメージも未だ残っていたのだった。明治二十六年六月の『国民之友』に載せられた「日本国民の品格」という文の中では、世界の国々が三種類に分けられている。

国に三位あり、敬重せらるの国あり、恐懼せらるゝの国あり、輕侮せらるゝの国あり、米国の如きは、第一の国也、露国の如きは、第二の国也、埃及朝鮮は其三者也。第一は文明を表し、第二は野蠻力と獣欲との旺盛なるを表し、第三は、文明力と野蠻力と與に微弱なるを表す（『国民之友』第一九四号、明治二十六年六月二十三日）

ここに中国の位置づけがないのは興味深い。言うまでもなくここでいう「文明」は西欧の近代文明をさし、まず中国と無縁であると見てよい。一方では、中国はロシアほど強くかつ恐ろしい「野蛮力」をもってはいないが、実力は日本にほぼ匹敵し、朝鮮に対する宗主意識をなかなか手放さない。つまり日本の築き上げたい世界図式の中にあって、中国は目の前にふさがる邪魔者にほかならないのだ。そうした中国を上の図式の中に強いてはさんでみれば、恐らく第二と第三位の間に位置するだろう。第二位・第三位の中間に置かれるであろう中国のイメージが、日清戦争を機にたちまち第三位に下降したことは、以下に展開する議論を待つまでもなく、上の祝捷大会の記録を見るだけでも一目瞭然であろう。

2、日清戦争における義・力・利の自己意識

日清戦争の進展とそれに伴う輿論にうかがわれる中国の姿を探り、そこに映し出された日本の問題、そして日清戦争に対する日本国民の姿勢、或いは多くの近代国民国家の戦争を支えた社会意識の根源は、いったいどのようなものであったのか、が私の関心を引くところである。日清戦争の進展

に伴って展開されるさまざまな分野にわたる議論、唱道、画策、研究を丹念にたどってみると、そこから、批判、蔑視、同情、破滅、期待、義憤、貪欲、自信、自負……が、複雑に交錯し、且つ矛盾に満ちながら生々しく湧き起こってきたのである。そのような日清戦争に対する社会意識のあらゆる統一と矛盾を考えるのに、総合雑誌としての『太陽』は見事に多くの材料及び啓示を与えてくれた。つまりそれらのすべてを『太陽』の「総合」的な世界において見ていくと、そこに潜在している一種の根源的な緊張関係が、自ずと明らかになってくるのである。そこには義・力・利という三つの要素が絡み合いながらうごめいているかに見えてくる。日清戦争に対する日本の自己意識のありかたを、義・力・利の三者を核として追跡してみよう。

(1) 義による意味づけ

日清戦争の性質を何よりも「義戦」とする認識は、この戦争を支えた最も普遍的な精神であるといえよう。例えば、

弱きを救ひ邪を挫く、正々堂々仁義の師を起して悪逆無道の豚尾人種を膺懲したる其結果は、日本帝国の真髄を萬国に発揚し、(「日本と欧米」、第一巻第五号)

のような意識は極めて一般的である。それはまた創刊号に掲載された漢詩「敵愾百首」などからも「義戦」とする雰囲気がよく伝わってくる。

……我兵義憤出至誠、至誠所感鬼神避、黄海又聞斃老鯨、王師他日全勝後、永使東洋謳太平(「平壌行應制」土方秦山)

扶弱制強果孰功、兵権掌握覺談雄、請看八道文明素、在此彈丸一發中(「偶成」大島如楓)

……韓人始服我至誠、挫強扶弱義俠情、君臣感泣擧国聴、獨立護得三韓城……(「甲午八月、贈門生某等従軍、在三韓」蒲生裘亭)

ここに反映されている戦争の性質に対する認識は、簡単に言えば、すなわち「朝鮮独立のために」という政府及び新聞機構が内外に立てた最も大きな看板と呼応したものである。従って多くの知識人がさらにその「義」の意味を深め、日清両国の戦を文明対野蛮の戦にまで意義づけたのである。例えば福沢諭吉は、この戦争を「文明開化の進歩を謀るものと其進歩を妨げんとするものとの戦」(「日清の戦争は文野の戦争なり」、『時事新報』明治二十七年七月二十九日)と規定し、また「只世界文明の進歩を目的」とするものであるから「人と人、国と国との事に非ずして、一種の宗教争い」と主張している。またその後まもなく反戦の立場に変わった内村鑑三も、一時は他の論者たちと同じく、上のような戦争の受け止め方をしていた。彼は宣戦の直後、雑誌『国民之友』に英文で「日清戦争の義」という文を草し、「孔子を世界に供せし支那は今や聖人の道を知らず文明国が此不実不信の国民に対するの道は唯一途あるのみ、鉄血の道なり、鉄血を以て正義を求むるの途なり」、「日支の衝突は免かる可からざる

者ならずや、新文明を代表する小国が旧文明を代表する大国と相隣して二者に終に必死の衝突に来らざる事は歴史面上未だ曾て其例を見ず」（『国民之友』二三四号、明治二十七年九月三日、本人の邦訳による）と論じ、欧米人の理解を求めた。ところが、『太陽』には以上のような一つのイデオロギーを振りかざして正面から日清戦争に対して理論づけようとした言論はあまり見られない。そもそも一定したイデオロギーを内在し、思想界を先導しようと志向しないのは、もとより『太陽』の一つの性格であり、ある意味では客観的、ある意味では思想性の欠如とも考えられる。しかしそれゆえに『太陽』はかえって社会の反応の公約数としての特色があらわれているとも言えよう。

思想家たちの意味づけだけではなく『太陽』の「総合」的な言論を見ていくと、日清戦争における「義戦」認識には、以上に述べた「文明と野蛮」図式による優越感、主動者意識も大いに働いているが、世界情勢の中で歴史的に蓄積されてきた、明治以後も好転しない対西欧の屈辱感、また朝鮮の壬午軍乱（一八八二年）以来中国に対して被害者としての復讐意識も深いところで作用したのであろう。そのような不平の思いは、自らの国力が進歩するにつれて一層強まってくるのである。例えば、『国民之友』の先の文は続いて次のように述べる。

（日本）僅々二十餘年の歳月を以て、此長大足の進歩を爲す、是れ豈に世界人民の敬重を受くるに適當ならすとせんや、然るに世界の我を遇する、猶第三の位地を以てするは何ぞや。……東洋に於ける、最も進歩し、最も成長し、最も開化し、最も大なる智識と最も大なる兵力とを有する一大国民、猶白人の輕侮を免る能はず、吾人半夜之れを思へば、如何ぞ枕を蹶て起たざるを得んや。

つまりいわゆる「弱者」を扶持し、「悪者」を撃破する他人に対する解放だけではなく、それによって自分自身の解放もはからなければならなかったのである。

(2)「力」主義の勃興

このような不平或いは圧迫感はついに日清戦勝によってあたかも「国民十年の愁眉は将さに一朝にして伸びんとす」のように一気に解放された。だから戦勝後の一般の反応は上記の文とちょうど対照的である。

殊に美々しく派手なる戦争をなして花々しき大捷利を得、世界の耳目を聳動して二千五百有餘年来の日本帝國局面を一變し、此間吾が無數無量の祖先が夢にだも思はざりし、世界の最も光榮ある、強富なる、又最も完全なる一大國民として宇内に存在するの期に會ひたる實に我々は開闢以来最幸最福の日本國民たるなり（飯田旗郎「亜細亜の大商戦」、第一巻第二号「論説」欄）

ここに端的に示されているように、日清戦争前後、国際地位における日本の自己向上の意欲は社会の奥に根強く潜在していたのである。そして日清戦争の勝利は恰もこのような意欲を大いに満足させたのである。本来の尚武の精神には「義」が伴っていた

はずだが、戦勝は義より力を鼓吹する風潮に拍車をかけた。戦勝に対する意味づけも、朝鮮独立のための「義」の発揚であったものから、あっさりと日本の「国威」の発揚へと転換してしまう。

(3) 「利」の興奮

日清戦争による現実的な利害関係について、『太陽』ではまもなく統計が出た。すなわち中国の有形損失は「總計二十六億九千六百四十二萬七千八百圓」、さらに「此の地、日本に拂ふべき償金を算せば、其の額や實に甚だ大なるべし」と計算した。それに対して、日本も戦争によって損なう所は少なくないが、戦勝したことによる戦利品を計算すれば、「清国の損する所は、乃ち大抵我れの益する所たり」であって、結局「總計二十五億二千五百七十八萬九千六百九十一圓」の利益を得たという。(「日清開戦の利害」、第一巻第三号「政治」欄)

大量な戦利品、高額の償金、広大な新領土、西欧列強と並びかつそれ以上に獲得した大陸での権益拡大など、戦前に予測した以上の巨大な現実的な利益が戦勝によってころがりこんできたのである。そのことは、やがて社会における義の精神、力の自信が速やかに利への興奮と結合し、混在する状態を呈して行く。例えば、

米穀、被服、軍器彈藥、金銀財寶、此の如き分捕物は其數を知らず、黄金の山を積み累ねて築きたる大軍艦や砲臺、白銀の函を巻き散して設計したる港灣や田地、悉く皆な吾が手に占領せられて自由自在、而して今や幾億萬の償金は這入りて帝國に充實せられ、肥沃なる土地は改めて帝國の版圖に加はりて其富を殖さんとす、……試みに償金を取りて考究せよ、假りに五億兩と定めて之を計算すれば、……之を一圓銀貨を以て一ッ一ッに列へて延長すれば七萬三千三百有餘里となる、即はち全地球の中心を五六回廻はすに足るべし……(飯田旗郎「日本と歐米」、第一巻第五号「論説」欄)

義・力・利が一つの坩堝の中で燃えさかるこの段階に日清戦争が至ると、福沢諭吉のような思想家たちのいわゆる単なる一国家の利益をめぐる争いではなく、「一種の宗教争い」(同上)という断言、或いは内村鑑三の「其物質的に吾人を利する所なきは勿論なり」(「日清戦争の義」同上)という「義戦」の主張は、『太陽』の論調を見るだけでも明らかなように、その現実的な根拠は一挙に崩壊したに違いない。そこから内村鑑三は抜け出して、明治二十七年(開戦中)十月の「日清戦争の目的如何」においても、戦後に書かれた次の文においても、戦争を肯定する一般の風潮に抗して徹底的に日清戦争の性質を問いつめたのである。

彼等は日清戦争を義戦なりと唱へり、而して余輩の如き馬鹿者ありて彼等の宣言を真面目に受け、余輩の廻らぬ欧文を綴り「日清戦争の義」を世界に訴ふるあれば、日本の政治家と新聞記者とは心密かに笑て曰ふ「善哉彼れ正直者よ」と、義戦とは名義なりとは彼等

の智者が公言するを憚らざる所なり、故に戦勝て支那に屈辱を加ふるや、東洋の危殆如何程にまで迫るやを省みる事なく、全国民挙て戦勝会に忙はしく、ビールを傾くる何万本、牛を屠る何百頭、支那兵を倒すに野猪狩りを為すが如きの念を以てせり、而して戦局を結んで戦捷国の位置に立つや、其主眼とせし隣邦の独立は措て問はざるが如く、新領土の開鑿、新市場の拡張は全国民の注意を奪ひ、偏に戦捷の利益を十二分に収めんとして汲々たり、（「時勢の観察・其二、実益主義の国民」、明治二十九年八月一五日、『国民之友』三〇九号、『内村鑑三全集』3）

内村鑑三が現実を冷静に見つめることができたのは、時代、社会、国家を超えるだけの知力を持っていただけではなく、まず自分自身の内部に潜んでいる自負、野望、利欲、虚偽などを真の理性によって内省し、且つ超えることができたからだ。だが、内村鑑三の存在は当時の社会一般においても、思想界においても空谷の跫音と認めざるを得ない。当時の一般風潮において、もはや関心の中心は戦争の「義」への確認よりも、政府と同じように際限なく国権と実利を拡張しようという方向に傾いていた。日清戦争の時、国民の中からあがっていた快哉の叫びには、勿論義の精神、民族進取の自信なども沸きたっているが、それと同時に膨張する自負心と大利獲得の欲望とが混在して作用していたことは明らかであろう。そのことは、やがて対外侵略を正当化する方向に押し進めていく社会的な力になる。日清戦争後まもなく、完全に「義戦」の精神と反する実利実力主義の戦争論が堂々と登場するのも理解にかたくない。例えば、

> 國際の交情は猶ほ博徒の親分が高利貸を兼業とするに似たり、苟くも口實あれば、迫りて自から利し、若し理屈無れば、腕力を以て之を脅かす、……或は國是を侵略に定むる主義と、自衛主義に定むることにより兵備の多寡と陸海軍の輕重を異にするの説あるも、余を以て之を見れば、方今の列國は、陽に侵略主義を執ると公言する者なきも、陰に自衛主義を以て甘んずるもの無かるべし、……這般の兵略、全たく進取を主とす、故に或意味より之を言へば、侵略主義として目せらるゝもまた已を得ざるなり（「某大佐の兵事談」、第一巻第六号「政治」欄）

もそうであるし、とにかく「戦争の進行に随つて勝者の欲望、要求の増進するは当然なる」は一般的な認識になっていたのである。それをさらに各政党及び言論界の対中国政策論の展開と合わせて考察してみよう。

二、日清戦争の進展に伴う政策論の主旨

1、日中の軍事力に対する評価

日本海軍の設立は中国より遅れたが、ひとたび創立するや、中国海軍の主力の北洋水師を仮想敵とし、急速に全面的な発展を遂げ、日清戦争の直前にはもはや中国を追い抜いていた。日中海軍の勝敗を決定した

黄海海戦の直前、洋務運動の推進者としての直隷総督、北洋大臣の李鴻章は皇帝に次のような上奏文を書いた。

詳考各国刊行海軍冊籍内載、日本新舊快船、推爲可用者共二十一艘、中有九艘自光緒十五年（一八八九）後分年購造、最快者毎點鐘行二十三海里、次亦二十海里上下、我船訂購在先、當時西人船機之學、尚未精造至此、僅毎點鐘行十五至十八海里、……自光緒十四年（一八八八）後、我軍未増一船。……倭人心計譎深、乗我力難添購之際、逐年増置、臣前於預籌戦備摺内奏稱、海上交鋒、恐非勝算、即因快船不敵而言。儻與馳逐大洋、勝負實未可知。（『六十年来中国與日本』第二巻第十二章第二十七節、大公報社出版部、中華民国二二年三月）

対外主和派の李鴻章にとっては、中国の軍事力は他の国より弱いと認識し、自ら戦争に立ち入るよりもまず国力と軍事力を蓄え養い、自強の道へ進んでいくのが上策である。だが、当時において彼の最大の政敵である対外強硬派（清議派）のほうは、終始彼の方針と対立し、北洋海軍の建設問題に関しても朝廷で激しく争い続けていた。しかし国際情勢は彼らの争いの結果を待つことなく、突然彼らを実演の舞台に押し出してしまった。李鴻章の提起した軍艦問題は結局未解決のままであったことも原因として、二十年余りの歳月と膨大な金銭を費やした北洋海軍は次々と黄海海戦で敗れ、威海衛で全滅するに至った。戦争前後の日清海軍状況については以下の記事が参照できる。

日清開戦前、両国の海軍實力は實に左の如くなりき

大日本　二十八艘　五萬八千六百二十噸

清國　五十二艘　六萬九千九百二十噸

即ち日本軍艦は、清國に比して實に一萬一千三百噸の不足なりしなり（「日清両國の海軍實力」、第一巻第三号「政治」欄）

しかし戦後の状況は「日本、四十四艘、八萬三千三百八十五噸」、「而して清國の海軍は、南洋水師、福建水師及び廣東水師の残部のみにして、其の實數左の如し、清國、二十七艘、二萬五千百五十八噸」になった。従って、

清國海軍は、日本と戦へるがために、全く二十五艘、四萬四千七百五十六噸を失へるものなり、清國現數の艦數は、尚ほ二十七艘、二萬五千百五十八噸あるも、其の最大なるは二千七百噸（南洋水師の主戦艦寰泰と鏡清）のみ、且つ老朽にして兵器鈍劣、到底戦ふに足らず、況んや其の将校の怯懦なる、到底北洋水師の比に非ざるをや、一言以て之を蔽へば、清國海軍は、今や全く無能力となれるなり、全く戦闘力なきなり」（同右）

という。

ところが、日本の輿論が関心を寄せたのは、日清戦力の比較よりも、軍隊組織、軍人素質の比較であったのである。その中でも北洋水師に対する高い評価が目につく。

不整頓、不規律、怯懦、暴虐を以て最も不名誉なる清國軍隊中に在て、其の北洋水師のみは、頗ぶる尊重すべき名誉の海軍たるとは、義心強き我が日本人の明らかに認むる所なるべし（「北洋水師の名誉」、同右）

また多くの新聞は北洋水師の提督丁汝昌の自殉について「實に支那四億萬の人民にも、尚ほ義を重んじ、恥を知る男児漢あるを世界に公示する所以也（「国民新聞」、二月二十一日）」（第一巻第三号「輿論一斑」）、「従容として死に就き以て其節を全うす、古の列士義人と雖も之に加ふべからず提督は實に清朝末路の名士なり（「朝野新聞」二月十九日）」（同右）などと賞賛を惜しまない。しかし北洋水師に対する称揚は、実は清国の軍全体に対する蔑視とそれに対応する自国の軍についての自信のもたらしたものにほかならない。北洋水師は、「萬緑叢中紅一点」（「毎日新聞」、明治二十八年二月十九日）と指摘されるように、あくまでも特例であって、「怯懦不練」こそが清軍全体のイメージであったのだ。例えば、

是れ彼の軍隊には規律なく、將校人を得ずして、殊に統一互援の法なき等必ず其の源因たることを免れざるべし、然れども彼れの一人一個の體格を捕へ来りて、我が一人一個の體格に比べなば、其の軀幹の偉大、其の筋肉の發育、其の腕力の優勝は遙に我れを壓する者極めて多多なるならん、隨ひて個人の闘争としては彼れ優に我れを制し得るの筋力ありと謂ふべし（西村貞「教育些談」、第一巻第八号「教育」欄）

という。また、

我隣邦の民は體力に於ては我邦人に比して劣らざるのみならず或は過きる如き者も一旦身命を抛つべき戰爭に臨んて群羊の猛虎に於ける如き觀ある者は現在の事實か吾人に證明したる所なり故に武徳の精神備はりて後體力智識を語るべし、……職として軍隊を組織する原料の如何に因る下等の種族のみを以て組織したる軍隊は其品格自から劣等なるは勿論にして支那兵の如き是なり想ふに支那兵は其國人一般の品位に照して尚一層劣等なるものの如し武徳の不備不完なるは其技藝學術の拙劣なる度より一層甚しきが如し……（曾我祐準「教育と兵事（軍事と教育）」、第一巻第二号「講演」欄）

中国兵士の体格は劣らないのを認めながら、軍隊組織のまずさと、とりわけ兵士の戦意の不足が蔑視されている。武勇を徳とする伝統をもつ日本人にとって、中国兵士の怯懦、怠慢、一撃にも堪えずに退却したことは、愛国、忠義の精神を持たないばかりではなく、品格と道徳そのものが劣るものとみなしている。このような兵士観は勿論兵士論だけにとどまっているわけではなく、ただちに一国の国民性にまで拡大されていく。それも後に一層強まってくる中国蔑視の一つの要素である。軍事力を客観的に比較することにより、兵士の性質、果ては民族の優劣へと精神論的な方向にすり替えられていくのである。

日清両国の軍事力に対して、日清戦争を経て、日本は充分な自信を持つようになった。中国は近代的な武装及び数量膨大な軍隊を持っているが、真の意味での近代的軍隊組織と勇練の将士は揃っていないことが明らかになった。そとから見えた強大な中国の内実が空虚であったことは、日清一戦で両国いずれにも大きな驚きを与えた。やがてこの結果は両国の近代史を大きく変えていくことになる。

2、武力征服論の膨張

本多利明（一七四三―一八二〇）の北方殖民地の発想から佐藤信淵（一七六九―一八五〇）の具体的な中国征服論を経て、つまり十八世紀の末から十九世紀の初めにかけて、既に中国併呑の野望は徐々にかたちをあらわしてきていたのである。例えば佐藤信淵の『混同密策』（一八二三）の中で、中国に対する攻略は、まず満州から始め、そして朝鮮から北京へ、さらには南京・華南へと押し広げていくとかなり具体化されているのである。江戸末の学者、思想家たちのこのような夢想は、一部の論者の空論の域をでないが、それが七、八十年後の日清戦争を機として集中的に「実現」され始めることになった。しかもそれは限られた人の夢想を越えて、広く受け入れられていったのである。山県有朋が日清戦争の戦場から天皇に出した意見書をはじめとして、以下に検討していく対中国政策論のいずれもが、中国、朝鮮を対象として十八世紀以来膨張してきた大陸拡張思想を延長し、それを現実化していく展開にほかならない。

(1) 獨立併領説（尾崎行雄「対清政策」、第一巻第一号「論説」欄）

日支同盟説　「瀕死の病夫を戰場に伴ふが如し、寧ろ我が大害と爲るも、決して利益とはならず」

共同扶翼説　「口を扶翼に籍つて、各々私利を經營するは、歐人得意の技倆なり」

獨立扶翼説　「支那人の蒙昧頑愚なるや、徳に服せずして却つて怨を蓄へ、強ければ則ち復讐を思ひ、弱ければ則ち滅亡を擇まんも亦まだ知る可らず、苟も此の如くんば、到底獨立扶翼の實を挙ぐる能はず」

共同分割説　「歐人をして東亜を蹂躙せしむるは、其治安を永遠に保持する所以に非ざるなり」

獨立併領説　「支那人は古来暴政虐治の下に生長し、縷々胡児賤夫の駕御を被れり、故に其習性従順にして御し易し」

……

選択として「唯だ獨立併領の一あるのみ」

(2) 勝利による併呑拡張説（改進党総理大隈伯の談、「征清の結局奈何」、同右「政治」欄）

「占領地は勿論我が所有地なり、我が軍隊が略取したる地は、我が天皇陛下の主權に屬する領土たり、……看よ、開戰の始めに當ては、政府の人々は勿論、對外強硬派の士と雖も、今日の如き希望はあわざりしな

らずや、但だ清國の弱きと意想の外に出で、我が陸海軍は連戦連勝の勢ひに乗じて、既に盛京省の過半を占領し、海上權をも掌握するに至りしが故に、其の希望は彌よ益々増進せるのみ、此の度合を以て推測せば、我が勝利と要求とは比例して殆んど其の際限なかるべし」

(3) 北京遷都説（国民協会の首領　品川子の談、同右）

「第一希望する所は遷都なり、即ち我が聖駕を奉じて都を支那本土に定め、我が帝國仁義の教と文明の主義とを以て彼の四億萬の民を治むべし、……第二の希望として清國領土の要部を我れに割譲せしめ、以て永く東洋の平和を維持せんを要す……」

(4) 東三省併領説（自由党総理　板垣伯の談　同右）

「大連灣をして將來亞細亞の一大貿易市場たらしむべきことは、東三省併有の主眼たり……」

……

(5) 併呑尚早説（犬養毅「支那併呑論を評す」、第三号「論説」欄）

「故に目的の全部を幾個に分割し今は唯其一部を得るを以て姑く満足せざる可らず然れども所謂其の一部は必ず一面には満清の死命を制し一面には西洋諸國を控制に足るものならざる可らず」

以上の意見が示しているように、具体的な進路はそれぞれであるが、武力征服論はいずれも基本的に中国の討滅に向かうものである。尾崎行雄の上文の「日支同盟論の、既往に大勢力を有し、将来亦尚ほ多少の勢力を有すべきは、」からも分かるように、日清戦争の時期を機として、それ以前の同盟指向の日清関係論はもはや「大勢力」から「多少の勢力」に一転したのである。結局古川万太郎の『近代日本の大陸政策』（東京書籍、一九九一）に指摘されているように「日清戦争以前から形成されてきた大陸政策は、日清戦争によって基盤が固められ、以降日本は朝鮮、朝鮮から満州、満州から中国大陸本土へと、大陸政策なる侵略主義政策を一途に展開していくことになる」。

3、商略及び殖民論

日清戦争の前後は日本近代産業発達の開始の時期にあたり、それに応じて、日本の物質に依拠しない精神の伝統が消滅を速めた時期ともいえよう。戦前の日本における生産過剰と市場不足の矛盾は戦争に拍車をかけ、そして膨大な戦費の支出はまたさらに対外貿易の拡大、生産の増殖を要求した。次の記事は正にこうした日本の置かれた経済的な状況を反映している。

我が製鹽業は、年々其生産は需要に超過し、……而かも尚ほ生産過多の憂なきを得ず、然るに一朝販路を清國に得んか、如何に多くを産するも、敢て供給の需要に超過するの慮なく、之によりて輸出の額を増すもの極めて衆多しからんとす、……先づ販路を開き、而して後生産を拡張す、世に之より安全なる事業無けん、（「食塩の清國輸出」、第三号「商業」欄）

このような徐々に強まってきた経済矛盾の解消は、当然日清戦後の経済界における対中関係の中心課題となったのである。そのために、商業界もさっそく戦勝の熱気に乗じ、貿易発展をめざして己れの日清戦争支持と期待を示していた。

讀者よ余が茲に云ふ大責務大事業とは朝鮮保護を云ふに非ず、東洋平和東洋人種防護を云ふに非ざることを思へ、余が謂はんと欲する大責務とは亜細亜洲の大商戦にあるなり、（飯田旗郎「亜細亜の大商戦」、第二号、「論説」欄）

日清戦争の意義に対する経済界の理解は、言うまでもなく貿易拡大の可能性そのものであった。これまでの貿易競争における中国に対する弱勢を逆転しようとする意気が、武力の成果を背景としながら一層盛り上がっていた。

商業軍の大本營は何地に之を定むべき乎、已に占領せし大連灣に置きて可なるべき乎、或は地理形勢の最も適當なる台灣を占領して茲に置くべき乎、台灣を占領して吾商軍の大本營となし以て東洋全局の商戦に臨まば、清商軍は掣肘せられて大に其働を鈍くすべし、……而して商戦上占領したる土地の、主權をもしらざるが如き無神經の士民は得意として接すべく、以て突貫し以て掣肘し、商利を絞り實益を吸収せば、所謂實力戦爭の實を擧ぐるものにして、彼れは其血液を絞り去られて自ら滅亡すべく、残酷なる血汁を流さずして以て彼を壓服することを得べし、豈夫れ愉快ならずや、（同右）

ここからもうかがえるように、商業界は政界・軍部のように際限なく戦争を進めようとは主張しないが、遼東半島、台湾の占領及び中国における新貿易港の開放、政治経済権益の上昇などの戦果を歓迎し、且つそれを己れの景気対策に利用しようとした。ところが、こうした貿易相手の視点から眺めた中国はまた別な顔を持っていた。

清國國民我より物を買へば彼れ又大切の御客様たり、……我れは天法に背くもののみを罰し、而して其餘は良民として待ち、得意客として歡待すべきなり、聞く吾占領地に於ける大清民は吾新主權を認め、誠實に臣服せりと、清人の多くは政府の如何に頓着なく、其主權者の何姓なるは多く措て問はざるが如し、之れ尚一層吾商業を擴張するに便宜ならずや、（同右）

ここでは、日清戦争前後に強まっている中国に対する悪感情はどうであれ、とにかくこれから中国人を商売の最大の相手として認めなければならないと主張している。また「商」の世界において、中国人の政治不信、愛国心の欠如などはかえって日本にとって有利であるばかりではなく、新たな価値観によってそこに積極的な近代的意味を見出すことすらできた。

三皇五帝以来元明清の今日に至るまで、幾たび朝を代へ君主を改むると雖ども、支那國民は依然として變はるなく、唯だ善政を布く者を君主として仰ぐのみ、故に民心を失ふの君主は之を討伐し、

……彼等は實に專制政治の下に在て最も多く共和政治の思想を有する人民と云ふべし、（「食塩の清國輸出」、第三号「商業」欄）

つまり一定したイデオロギーによる社会観、文明史観に囚われることなく、もっぱら経済利益の視点に立つ中国観は、意外なほどに政界、知識界よりも平等意識が流れ込んでいるようにも見える。もちろん、それは危険な方向へ転じていく可能性も含んでいるのだけれども。

貿易富国策が速やかに進められていく時に、一方ではもう一つの富国策として、十八世紀以来興ってきた殖民論もまた新たな段階に踏みこんだのである。明治二十六年（一八九三）二月に設立された殖民協会は、その設立の趣旨についてみると、第一に人口問題を取り上げて「我國の人口近年非常に繁殖し我一方里の面積には人口凡一千六百人餘を有し其増加の割合は毎年凡四十萬乃至五十萬人なりとす今より七十餘年を經ば我国の人口八千萬余人即二倍の多きに達すべし」（「殖民協会」、第一号「輿論一斑」欄）とし、そのために新しい地域を開拓する必要性を主張し、やがて海外殖民まで言及している。ただ、次のように平和的な手段を述べ、主な目的はあくまでも人口移住のためである。

彼の兵力を以て人の國を略し地を掠むるか如きは以て我國の殖民政略と爲すべきに非らずと雖も海外に適當の地をトし平和の手段に由て之を行ふに於ては何の妨か之れあらん（「殖民協会」設立趣旨、同右）

しかしこれまで述べてきたように、日清戦争の勝利による台湾、澎湖の割譲、遼東半島の占領、朝鮮に対する主動権獲得などによって、かつての大陸拡張の夢想は次第に現実化しつつあり、また殖民の対象地に対する優越感も急速に上昇したのである。それはかつての人口移住の目的から、やがて権力支配へ、つまり原覚天氏の『現代アジア研究成立史論』（勁草書房、一九八四）に述べるように「もはや単なる殖民目的ではなく、政治的支配による植民へと転換している」のである。例えば、志賀重昂の「探検及び移住の方針」（『太陽』第十号「政治」欄）における「殖民」思想の中に、支配者としての姿勢はすでに明らかになっている。彼が移住地を上、中の二つに分け、「人民にして弱なり小なる處」を上乗とし、「強盛なり殷富なる處」を中乗としたのである。中乗の地においては、

乙土の利源を開發擴大したる結果を、甲國人民にして爲めに若干の利益を得たるも、而かも此の如く開發擴大せし利源は畢竟乙土に歸し、真個の實力は主人たる乙土人民の掌握する所となり、……

であるのに対して、上乗の地においては、

真個の實力は移住したる甲國人民の掌握する所となり、甲は新主人となり、新甲國（甲國が日本なりと假定せば即ち新日本國）を搬建したるもの、其の甲國に利益する明然たり、是れ上乗の移住地となす所因。

なのである。またさらに日本人の上乗の移住地は「亜細亜洲にては●●、●●に在り、近南洋にては●●●●群島、●●大島に在り、南洋にては●●、●●●●●●群島に在りとなす」（●はママ）と暗示した。ここで上、中に分けるのは、正に主権帰属に根拠しているのである。

かかる主権支配の前提の下に進められた「殖民」思想は、国家の武力侵略と表裏をなして発展していく。例えば、

新に我殖民地を開拓するに便利なる、處女的新陸を發見するが如きは、到底望む可からざる所なりとす、故に我國に於て、新たに大に殖民地を開拓するの道は、僅に他國の承諾を得て、其領内の土地を買得又は借用する歟、然らざれば、外交又は戰爭の結果として、他國をして、我國の屬領又は保護國たらしめ、或は其土地を割讓せしむるの數手段に過ぎざるのみ（安岡雄吉「日本成長の方針」、第十号「政治」欄）

4、戦争弊害論

一方では、国民経済、優生学の角度から、また一種の戦争弊害論も唱えられていたことも忘れてはならない。例えば、第二号と第三号に連載されている「戰」は、戦争の経済上と人材上の損失などのマイナス面に視点を置いて論説を展開する。まず、「一聲其大を放ち去れば則ち濛々たる一團の黒煙は、其價兵士十八人の一生を養ふに餘りあり」の銃砲発射の高価、「一炬焦土と爲るもの」の田野、山林、家屋、橋など平和の経営の破壊をはじめとし、生産資本、労働力資本に至る経済上の損失を論じ、欧州戦争から日清戦争に言及して次のように云う。

凡そ今ま世は文明と稱す、而して戰の高價なることは今日に到て殆と其頂上に達し、而も各國の競ふて此の高價なる仕拂ひを惜まざるの状は、冷眼に觀察するときは、真に其の奇怪の現象に驚絶せざるを得ざるものあるなり、（千頭清臣「戰」上、第二号「論説」欄）

また続いて「戰」の下での人材上の損失について、次のように論じる。

強健なる者、教育ある者、勇氣ある者等の如き、皆な出でゝ戰爭に從事するの義務あるものとせよ、遺るものは尪弱者、病ある者、或は肺病、或は癩病の如き、即ち第一の淘汰に落第したる者は皆な盡く内に残りて其子孫を留め、子孫は即ち遺傳に由りて之を後に及ぼし、（同右の下、第三号「論説」欄）

さらに以上のような戦争の直接及ぼす災害だけではなく、「人心の之が爲めに恐慌し、貿易の之が爲めに沮滞し、社會の組織之が爲めに解弛し」（同文の上）などまで戦争弊害論を展開していたのである。「義戦」と考えられていた日清戦争に対しては支持の意を表したが、「土地侵略の野心に基く者」の戦争に対してはっきりと否定することによって、これは当時における一種の反戦論或いは平和論ということができる。

5、文明拡張論の対中国観

日清戦争の連戦連勝に伴って、中国に対する完全討滅的な考えが広まり、対中政策論における武力征服と拡張の野望が膨張する一方、必ずしもそうではない存在も尾崎行雄の言ったように「多少の勢力」があったに違いない。例えば、中国、朝鮮の駐在全権公使を勤めていた大鳥圭介の場合がそうである。彼は自分の内なる中国文化の教養と中国での実地経験とを生かし、当時の一般世論とはやや異なる独自の中国認識を示した。例えば、

而してそれなれば支那の人といふものは一向少しも他の事は考へ見ず、新規な學問を講究して國を益し世を益する事は考へぬかといふにさうでは無い、若い者の中に私共の知つて居る人には隨分其事を知つて居る人があつて私かに西洋の人に就いて學問をしたり或は私共の所へ參つて色々世界の形勢を聞きましたり、……支那人といふものは大變頑固にして進歩しがたき人だといふのが一般の説でありまする、近来の所で見れば如何にも敵國となって居れば夫は憎さも憎し又彼の短所も澤山ありますけれ共支那一躰の人民は私の考ではさう悪い人種では無いと思ひます、支那の國が腐敗して居る、支那は頑蒙といふのは實は支那の政府の腐敗支那の官吏が頑愚なのでありまして、支那人一般に腐敗して居るとは言れぬ……

（「日清教育の比較」、第一巻第九号「教育」欄）

ここでは、まず「頑固」或いは「進歩しがたき」といった中国の欠点を絶対的な本質とは見ず、また「腐敗」などの積弊も民族或いは国民性一般としてとらえてはいない。そこから出発する彼の対中国観も当然武力征服主義者と自ずから異なっていく。

何しろ日本の今日の位地になつて考へて見ますれば今我國の教育の法を幾分か導き容れて我が仲間へ引込んで行くといふ事でなければいくまいと思ひます、今日既に戰爭中にて既に敵に相違ないから憎むべきで御座いまするけれ共愈々近来の風聞の如く事實平和に談判といふものが調ひましたならば夫からは彼の手を執つて進んで彼を導きてやらなければならぬのだらうと思ふ、さうすれば詰る所は支那が戰爭の上では負けましても良い教を受けて學問の道を聞き人智進歩の仕方に於て從來大なる利益を獲るといふ事になれば支那も非常の仕合せになるだらうと思ふ、若し此戰爭が無くして居つたならば到底人心の改進は思ひもよらぬ今日は最早日本が先導者となつて、彼大国の人民四億萬人を教導しなければならぬ事だと思ふ、さうなりますと日本の方が先生で、日本の方が兄分で、向ふの方が弟でさうして弟子にならなければならぬ、……今日の勢ひで戰さは勝ち大抵戰爭も終はるでありませうと思ひます、私は至極喜んで早く平和に歸する様にありたいと思つて居ります、……今世界の人の人氣、評判の好いに乗じて他國に對して高慢な顔をせずに他國

の愛を受けて人氣を取る事は日本の天下が段々膨れて行く跡との爲にならうと思ひます、(同右)

ここでは、武力征服論者と最も異なるところは、中国を撲滅の対象としているのではなく仲間として導いていく「同盟」の視点に立脚し、戦争はあくまでも中国に目を覚まさせる一つの手段にすぎないと考えている点である。勿論彼のような一種の平和論者にとっても日本がアジアに対して絶対的な優越性をもち、これからは当然東洋の盟主、世界の大国の地位を占めなければならないと考えている。しかしそれを完璧に実現するには決して武力のみで達成できるものではなく、先進国であればこそ、平和の力で先進文明をもって後進国の文明開化を徐々に導いていかなければならないと考え、そのために彼らは武力征服よりも文明輸出に熱心であった。

このような考え方と共通性を持つものは『太陽』にまたいくつか見える。例えば第一巻第二号の史伝「曾國藩」はその一つである。その中に曾国藩の「文治武略の二大局面に渉れりとす」る中興の経綸について、「蓋し支那の大革新にあり」と評価して次のように述べる。

曾國藩が國家の自衛を講じ、國防を完備にし、以て着々支那をして富強の道に就かしむるの經綸は、此の如し。然れども曾國藩が畢生の事業とする所は、此に止らず。支那數百年間の一大積弊と云ふべき科擧の法を一變し、泰西の新智識、新學問を支那人士の腦髄に注ぎ込み、之によりて驚天動地の一大改革を實せんと企でたり。

また曾国藩の外交について

頻りに泰西文化の美を知りて、之を支那に輸入することに盡力し、平和の交を敦くし、通商を盛んにするの利たるを知りて、釁を開き事を滋くするの不利たるを知れり。故に他國を征服して版圖を擴張するの政略の如きは、徹頭徹尾之に反對せり。……若し曾國藩をして今日に在らしめば、日清兩國は決して戰端を開かざるべし。是れ曾國藩の主義とする所なり。

「義戦」論を前提にしながらも、曾国藩を誉め称える言葉の中に、日中両国ができるだけ戦端を避け、お互いに文明と進歩を図ることを願っている筆者の気持ちを読みとることもできる。一方では、清朝末期の「中興」を認め、曾国藩を「偉大なる人物」と判断することは、即ち中国の近代的な変革にかなりの理解を示していることでもあり、また中国の現状のひどさは必ずしも中国文化の歴史全体が必然的にもたらした結果であるとはとらえていない。同じ筆者はさらに同第六号の「清朝全盛の時代」の中で、康熙帝が満、蒙、漢の連合国家、東洋の大桃源を実現したと絶賛する一方、乾隆帝の過度の疆域欲望と窮兵黷武には批判的であった。彼の清朝の歴史に対するこのような理解は、決して彼の現代史に対する判断と無関係ではなく、否、寧ろ積極的に作用したのであろう。続いて日清戦争後における日本の進路について、中西牛郎の議論

は次のように展開される。

我が帝國陸海軍の將校兵士が、無比の勝利、無比の光榮を得て凱旋するの日は、即ち是れ我が帝國の外交軍、法律軍、工商軍、宗教軍、教育軍、技術軍、文學軍が生兵を以て入り代り、……第一の勝利は戰爭なり、第二の勝利は平和なり、（中西牛郎「日本帝国の任務」、第一巻第一号「論説」欄）

ここでは、軍事力の優位による征服が、殖民地の獲得、国内の人口問題、工業成長の引き起こす市場問題などを解消するといった実利的な覇権を目指しているのではなく、優位の文明による平和の感化をもってアジア、さらに世界に影響力あるいは支配力を及ぼす文明大国のようなものを理想としている。このような大国意識は後にいうところの近代帝国主義というよりも、寧ろ「東洋大桃源」のような古代中国の天下一統の理想の近代版に近いものと思われる。しかしながらこのような考えは後のアジア主義に織り込まれ、近代日本の膨張主義の意識構造を一層複雑にさせた。

文明拡張論は基本的にアジアを近代化しようとする啓蒙主義に立脚し、中国文化を全否定するのではなく、それを歴史的に、ある程度の相対化をした上で、改革すべきものと考えている。にもかかわらず、それによる具体的な中国観は論者の間で必ずしも一致するとは限らない。或る論者は中国の近代化を誘導し促進することによって、中国を仲間に引き込んで同盟者として共同して西欧に対抗しようとする。また或る論者は中国文化そのものが近代的な再生力を持たないのでなく、現代の中国人がその能力を失ったにすぎない、そして日本人の方が尊敬すべき中国文化の後継者にあたり、日本人の手で中国の近代を作っていかなければならない、そのために武力の使用も反対しない、と考える。こう見てくると、文明拡張論は結局一種の文化侵略論と思われるかもしれないが、ただ日清戦争の時期にはまだ文化侵略の性格までは形成していず、三十年代以降の状態と一線を引かなければならない。日清戦後、日本が積極的に様々な「文化拡張」対策を中国に実施するとともに、それに対して中国の方も決して受動的ではなく、盛んに日本を鑑み、維新変法を図ろうとしていたのである。教育、技術、商工業など多くの面で日本の体制及び経験をモデルに改革し、特に中、高等の教育機構には大量の日本人の教員を雇っていた。日本の近代文明の輸出に対する清朝の積極的な態度から、少なくとも当時の中国ではそれを決して日本の文化侵略としてとらえていなかったと言えるだろう。

三、日本人論と自国文化の再認識

日清戦争の時期における日本人自身による日本論及び日本人論については、ここまでの論述の中にも触れることがあったが、ここではその内容がどのような問題に集中して展開されていたのか、そこに如何なる日清戦後の日本文化のセルフイメージが映されているのか、などについてさらに考えてみたい。

1、中国と対照する視点

日清戦争後の輿論に浮き出された日本及び日本人の自己像を探ってみると、まず勝利した相手である中国との比較に視点を集中していることが目立つ。

(1) 中国人との「異質」性の強調

日本人が中国人と異質であるとする認識は、道徳、智力、体力から伝統、風土、国民性、更に文化にまでわたって盛んに議論されている。ここではそのすべてを扱うことができないため、最もよく比較されている「武勇」と「愛国心」の二点に絞って見ていこう。

まず「武勇」の点において。日清戦争は日本側にとって、はじめての大きな対外戦争である一方、はじめての近代国民国家の戦争とも言えよう。しかし少なくとも『太陽』の言論を見ると、日本の対中国の勝利は、日本の近代軍隊の組織・武装或いは近代国家体制の有効性よりも、まず日本人という民族、日本の伝統精神の勝利と意識されていたようである。

凡そ世界に軍國武人多しと雖も、吾皇國吾皇國民の如くに完全清美なる軍國武人たるものは之あらざるなり、余輩は今日急に之を揚言するには非ず、……二千五百有餘年の長き時間、間斷なく盛衰なく、消長なく變化なく、終始一徹武を以て國家の大主義となしたる國熟くに乎在る……（飯田旗郎「亜細亜の大商戦」、第二号「論説」欄）

また

日本國民は由來一達者一俠客なり、……ツマリ義を見てせざるは勇なしとして、人は魂魄の爲に生を享くるてふ、哲學的の高尚優美なる氣風を固守するものにして、甚だ美風たるに相違なきも、……祖先は吾々子孫に他の人種に比肩するものなき程の武力を與へ以て其よりして大々名譽を得せしめたり、（同上）

言うまでもなく日本の伝統において「武」は力であると同時に、精神でもあった。精神であるからこそ、清軍の「怯懦不練」「武徳不備」を徹底的に見下げ、またそうした清軍の性質を中国の国民精神として解釈していく。戦争の敗者としての中国は、実際にはどうであれ、ともかく日本像の反対の姿を呈していなければならなかったのである。

次に「愛国心」に関して。明治精神の骨格をなす特徴として、武士的精神に加えて国家主義が常に挙げられる。もしそうであれば、日清戦争後の社会において、愛国心は非常に普遍的に自覚されていたことも、一つの国家主義の強化として理解してよいであろう。そうすると、中国社会のある根元的なものも日本人の愛国心と対比されて、把握されていくのである。

（中国人）上下一般に愛國心の乏しきは本當のやうで御座います、ドウモ一躰に國を思ひ天下の爲に心を盡すといふ事が本當に無い、併し自分の業を營み或は町人は海外へ行つても自分の國に居ても能く勉強して難儀に耐へて僅

かの金銭を積み貯へて富を爲し……
（大鳥圭介「日清教育の比較」、第九号「教育」欄）

また「最強の商業人種」として挙げられる中国人は、

多く國立心なく、名譽權利心に薄く、神經に鈍く、只々獣類的の實利に眩惑せるのみ、……（飯田旗郎「亜細亜の大商戦」、第二号「論説」欄）

このように金銭欲に富み商業には強いが個人の利益を追求するばかりで、愛国心が乏しく統合力が弱い中国人、というイメージが、日本人とは正反対のものとして描き出されたのである。

名譽權利を目的とする干戈の戰爭は吾國民の大長所にして、……實利を主とする商業の戰爭は吾人の大短所、（同上）

また、

其効力は今度の戰爭に顯はれ、日本は愛國心に富み團結に固けれど、支那は國家的の思想に乏しく親和力もなし、（久米邦武「倫理の改良」、第五号「論説」欄）

このように中国と対照される日本の愛国心も、そもそも日清戦争の時期から新たな高揚に至ってきたものであろう。

愛国心が欠如しているという厳しい指摘は、中国人に対しても大きな衝撃を与えたのだった。そして正にその時から中国人の「国家」観念に変化が生じ、「愛国」の言葉もはじめて口にされることになった。日本人が愛国心を自覚して満足するのと相応じて、中国でも「愛国心の欠如」を自覚しはじめたのである。日清戦争後まもなく中国で始まった変法維新運動のリーダーの一人としてよく知られている梁啓超は、「中国の積弱の根源について」（一八九八年）の中で、「愛国心の欠如」について、次のように述べている。

西洋や日本では、中国人は愛国心がない、としばしばいわれる。私はもとよりこのことばを甘受する者ではないが、要するにわが国民の愛国心が西洋や日本にくらべて薄弱なのは、まぎれもない事実である。愛国心の薄弱なことこそ、わが国の積弱の最大の根源にほかならない。（『原典中国近代思想史』の邦訳による、岩波書店、一九七七年）

そして、その愛国心の薄弱な理由を研究し、続いてその源を「国家と天下の区別を知らないこと」、「国家と朝廷の限界を知らないこと」、「国家と国民の関係を知らないこと」の三点にまとめていたのである。

つまりその時、日本の中国批判の多くの内容は、驚くほど素直に中国の知識人達に受け入れられたのである。そして日清戦争の後、中国の多くの面にわたる体制改革は、はじめて日本を主なモデルとする風潮が起こり、日本の書籍は多数翻訳され、紹介され、社会の様々な面において日本の情報が増え、日本のイメージが中国においてはじめて形づくられたのである。これについては紙数の制限から、この指摘だけに止めておく。

また智力、性格、風習など様々な面にお

ける日中両国・両国民に関する比較が展開されていたが、最も重要な異質性として強調されたのは、やはり「武勇」と「愛国心」である。それはこの「武勇」と「愛国心」が、当時の日本文化のセルフイメージの中で大きな位置を占めていたからこそ、中国との「異質」感は一層深められていたのであろう。

世界に白色人種に優る人種なく黄色人種は到底劣等人種と西洋人が判断したるは彼等自稱開進光明國民の無學粗漏を自證するものなれども、余輩は少しく彼れの妄斷に斟酌を加へざるべからざるものあるなり、彼等は東洋に支那の覇たるを思へり、支那人民は東洋に於て大數にして實際最も開けたる民なることを思へり、支那人が大數なる故に其内より見本を取り、其人種を標準として日本帝國民を忖度したり、……其支那國支那人が今日の如き支那國支那人、西洋人が之に由りて日本を忖度したる又大に恕すべきものあるに非ずや、則はち之を反言すれば日本人は支那人の爲めに其真髄を誤まられて非常に世界人民より冤罪を祈りたりしなり、此點よりしても充分日本は支那を膺懲し、……（飯田旗郎「日本と歐米」、第五号「論説」欄）

中国とは如何に異質な存在であるかを強調することは、勿論日清戦争後に強まってきた対中国の優位意識であり、それはまた同時に西洋人に対する劣等意識から抜け出そうとする動きにもなっているのである。

(2) 中国文明を内包するセルフイメージ

上記のように、中国人との異質性の強調は当時の社会風潮において普遍的に認められるが、中国の文明に対しては、問題は複雑である。例えば、第一号に見える井上哲次郎の「戦争後の学術」には、日本と中国の文化関係について、次のように述べられている。

今日では日本人は支那人よりも先きに進歩しましたけれ共併し此の如き進歩をなすべき基礎は實に支那の學術によりて得た事が多いのであります、……千有餘年間日本人を鎔鑄しましたのは、主として支那思想と印度思想、此二大要素であります、……支那古代の哲學、文學等の日本人に取つて有益なる事は支那に打勝つたる後も少しも變るべき事は無いです、……（支那の古代の文學は）他国の文學ではあるが是は我國の文學といふも殆ど無理では無い様になつて居ります、さうして又印度思想、支那思想中に於て甚だ高尚なる元素がある、殊にまだ西洋に無い所の一種の思想がありますからして決して是等は排斥すべきで無い、亦ナカナカ排斥し得らるるものでは無い、我々日本人の骨となり血となつて歴代の結果を經て遺つて居るものでありますから……

ここでは、「脱亜入歐」論のように日本を中国文明から切り離そうとするものでないのはいうまでもないが、また伝統的な漢学者のように自覚的に中国文明に従属するものとも異なっている。東洋文化の一つの

大きな根源としての中国文明は、もとより西洋文明にはない独自性があり、それが日本にとっては決して外来の、或いは他人の物ではなく、日本文化の固有の物にほかならないと主張しているのである。そうした観点に立った上で、日本が進化、発展しているからこそ、中国の文明は絶対的、永遠的な存在であるとしてその価値を認め、一方では、その「中国文明」は、もはや現実の「中国」及び「中国人」とは無関係であるかのように考えられているのである。（中国文明が中国より却って日本の方に存続しているという観点は、のちに内藤湖南によってさらに発展させられる。）したがって、西洋の新学問を取り入れる必要もあるが、日本固有の東洋文化を捨ててはならないのみならず、東洋西洋両方の精華を消化することができるところに日本の独自性があり、日本文化発展の源泉となる、と考える。

このような日本文化論は、日清戦争後の学術界で代表的な一つの流れを作り出している。例えば、当時の学界のもう一人の巨人、加藤弘之の議論も井上と共通するところがある。

儒も佛も千年以前から這入つて來た事で、今日は全く日本の遺傳物となつて居る、固有同様のものになつて來た、……然るに近今に至り更に西洋の新學問が這入ッて来た、……學問の仕方が日本固有のものを能く保存し而して新學問を以て其を補ひ充分智識の開けたものにならねばならぬ、……支那人は全く其れに反して唯遺傳を保ち孔子の道と云へば孔子の道ばかりで少しも西洋の新學問を取る事を知らぬ、さういふ有様であるから日本支那の力が大に懸隔して今日の結果になると云ふ事が出て來た、（「遺傳應化の理によりて學問奨勵の方法を論す」、第六号「講演」欄）

ここでも中国文明をすでに日本に固有なものとみなし、その上で西洋の近代を吸収しうるところに日本の中国に対する優位を認めている。古代の東洋、近代の西洋の双方から解放されたところに、それらを同時に包容する新たな立場が生まれる。つまりまず日本があってこそ、はじめて中国ないし西洋を相対化することができるのである。日清戦争の後、特に学界において、かえって中国文明に対する姿勢は以前より柔軟かつ多様になったところから、その時代における日本自国文化に対する一種の自信が見えてくるのであろう。そのことについては以下にまた他の角度から続いて考察していきたい。

2、日本に即して日本を考える

国学運動、洋学運動、啓蒙主義、或いは「脱亜入欧」などの嵐を経た、日本の自国文化に対する認識は、日清戦争の後、速やかに成熟していくように見える。『太陽』における論調を見ても、国学、洋学、或いは啓蒙思想、に対する一種の折衷主義の言論が、主な地位を占めているようである。

儒者の人倫を説くに、文面上の空談は巧みなり、我日本は空談には拙なけれ

ど實際に優なり、……日本の風俗は國家の結合も家族の親睦も遙に支那より篤ければ、忠孝の行も自然的に篤し。然れども習慣的に孝道を談ずるは、畢竟二十四孝に類する行爲となして、感情に作用さるるまでに過ぎず、（久米邦武「倫理の改良」、第五号「論説」欄）

ここでは、儒教の根本価値観から完全に抜け出ていたとは言えないにしても、上に挙げた井上哲次郎の文化論とは一線を画し、儒学を聖壇から引き落としてその説教を正面から否定、否、批判することができたのである。要するに根本的に儒教を東洋文明の最高存在として認めず、儒教に代表される中国文化の教えがなくても、日本が自ら実践倫理において中国以上に理想に近づくことができると主張する。そこで勿論日本文化の独自の蓄積が強調されてはいるものの、東洋文化の歴史から完全に切り離してひたすら日本の固有性或いは神聖性を謳い上げる「日本主義」とも異なる。例えば、筆者はさらにこう述べている。

要するに日本も同じく支那の文明に照らされたるに相違なし、同じ気習の国にて、一は興り、一は滅ぶ、是まさしく道理は人の発揮する如何により盛衰をなす、（久米邦武「學界の大革新」、第一号「論説」欄）

歴史的に東洋文化ないし中国文化との根源的な関係をも認めながら、中国以上に発展した日本文化の独自の蓄積を肯定し、また現実の中国だけではなく、儒教を中心とする中国文明に対して、基本的に批判的であるが、脱亜入欧を提唱するわけでもないところは、国学者とも、伝統漢学者とも、欧化主義者とも、そして井上哲次郎などのアカデミー「新儒家」とも一線を引かなければならないであろう。

日清戦争の勝利で中国を破り、東洋で唯一の殖民地の持ち主になったことは、はじめて西欧列強と同格の存在として並列することを意味する。そして中国、アジアに対する優等意識の高まりとともに、西欧に対して平等を要求する力も一層強まる。この時点で、日本は千年「老師」の中国を完全に追い抜いただけではなく、目の前の「新師」の西欧に対しても相対的な視点を得始める。それは社会における盲目的な欧化主義にブレーキをかける一方、日本人、日本文化の価値の再認識もそこから盛んになっていった。例えば、日本文化は中国に従属していないことを確認しようとするのみではなく、日本の文明は明治以来懸命に追いかけていた西欧文明にとっても、未開か半開かではなく、もとよりそれと並列しうるもう一種の文明であることを強く意識し始めるのである。

吾れは永く眠りつつありたれども、國内に秩序ある美しき社會をなして一天下として生活しつつありしなり、立派なる一の開化を有して生活しつつありしなり、吾れは自然の勢道に從ひて國を開き、而して世界を見たり、……則はち自己も亦一の文明西洋人の知らざる一の文明を有せることを發見し、之を保持することを務めたり、即はち日

本は西洋の開化を講究し盡し、而して之に自己固有の開化を加へて一の大開花を作せるものなり、（飯田旗郎「日本と歐米」、第五号「論説」欄）

また、

吾人は一度は西洋の開化に眩惑して或は然らむとも考へたりけれども、西洋其物を實視するに及んで其の大に誤まれるを自覺し、今回の戰爭に由りて、吾人真の開化は或は反つて西洋人に優るところあるべしと考へしむるに至れり、……日本國民は決して彼れに劣りたる人種に非ず、人間に難しとする無形道徳の開化に至つては反つて西洋人に卓越し、今日以後は有形無形共に早く彼等よりも文明開化を作り、世界に於て劈頭第一に完全なる真の文明國となるべし……（同右）

といい、つまり日本文明の優越性は、明治開化の西欧近代化によるもののみでなく、日本自らの歴史時間の蓄積としてとらえられるのである。そして日本文化及び日本人に対する自己認識も、より自己本位の方向へと進んでいくのである。例えば、

日本國民は決して模造的に安心せず又應用的に安心せず進んで其進取の氣象を發達して一種の特色を造り出すといふは日本人種の實に特性であります（拍手喝采）……實に日本人民といふものは混和的の分子を持つて居る、外國の分子をば輸入して我國體と調合して、……大躰から見れば圓滿完全に混和して一種の國體を造るもので、是は恐らく宇内各國此の如き古い國で、此の如き特色を持つた國は御座いますまいと思ふ、……外國の文明を輸入して之を混和して國體を毀損せざるのみならず、國光を益宇内に輝かし、國家の基礎を堅くして國家の進歩を助くるといふ事は、是が日本人種の特性と私は思ひます、（金子堅太郎「日本人種の特性」、第九号、第十号「政治」欄）

日本文化における外国文明の要素を否認する、それに立つ日本人の「混和」特性を否定するのではなく、かえってそれに即してその意味を積極的にとらえていることは、言うまでもなく日本文化のより大きな度量と自信ができたからだ。そのことは、同時に日本及び日本人論そのものを遥かに超えた領域で意味をもつことになっていくのである。優越意識、支配の野望、侵略政策は極端なまでに膨張する一方、その時期に、哲学、文学、国語、美術、考古学、世界史など広い領域にわたる新しい研究が開拓され、それによって、日本学術文化の大きな進歩及び成熟が達成されていくことも、決してこうした風潮と無関係ではないであろう。